

藤澤桓夫の大阪回帰、 『街の灯』に込められた決意

高橋 俊郎

はじめに

二十歳で文壇にデビューした小説家ならば誰しも、三十歳までの十年間は混迷と確信が日々交错する悩ましい時期に違いない。藤澤桓夫にとってもその例に漏れることはなかったが、病床にあった二十九歳の時に、その後の小説スタイルを確立することになった。その主人公設定と文体は、五十五年に及ぶ創作活動でぶれることなく堅持された。そのきっかけが昭和八年（一九三三）五月から八月にかけて夕刊大阪新聞に連載された『街の灯』である。

藤澤桓夫の創作活動は四期に分けられる。大正十四年（一九二五）三月に同人雑誌「辻馬車」を創刊し、シュールレアリスムタッチの都会的小説『首』で新感覚派の新人と目された大阪高校（旧制）から東京帝国大学に入

学した二十歳から二十三歳まで三年間の「辻馬車時代」。昭和三年（一九二八）七月に東京帝国大学の左派学生で組織する同人雑誌「大學左派」に参加し、プロレタリア文学を創作の場とした二十三歳から二十七歳まで四年間の「プロレタリア文学の時代」。『街の灯』以降、新聞連載小説を中心に都会的な中間小説を量産した二十八歳から五十歳まで二十二年間の「流行作家の時代」。五十歳で初婚し、将棋小説や随筆に新境地を見出し、八十四歳で没するまで三十四年間の「大阪文壇の大御所の時代」である。^①

藤澤桓夫の著作は上梓されたものだけでも二百冊を超^②えるが、その真骨頂は「流行作家の時代」にある。『花粉』、『花ある氷河』、『淡雪日記』、『大阪五人娘』、『花は偽らず』、『新雪』、『生活の樹』、『翼』、『彼女は答へる』、『東京マダムと大阪夫人』、『白蘭紅蘭』、『妖精は花の匂いにする』、『天使の羽根』などの版を重ね、再版もされた小説群は、都会的な独自の小説世界を展開して、大衆に支持された。大正十四年から平成元年にかけてが創作期間であるから、正しく「昭和最後の文士」である。^②

そして、多くの小説の主人公に共通するのは「自立した青年」であり、脇役には極悪非道の悪人が登場することなく、悲惨なストーリーは皆無である。なぜその路線から外れることがなかったのか、その謎解きをしてくれるのが『街の灯』に他ならない。

一 転地療養に明け暮れた学生生活

藤澤桓夫の『街の灯』は、富士見サナトリウムでの療養中に執筆された。その療養生活は、大阪高校一年生の
大正十二年（一九二三）三月に肋膜炎を発症して進級試験を受けられずに落第した時から始まっていた。つまり、

文壇デビューの当時から、その創作活動は結核の不安の中にあつたと言える。そして、東京帝大に入学した翌年、昭和二年（一九二七）二月には突然に咯血し、横光利一の薦めで東京市ヶ谷の久野病院に二週間入院し、三月十四日には伊豆湯ヶ島温泉の湯本館に滞在していた川端康成を頼ることになった。そこでの予後の療養は半年間に及んだ^③。

同人誌「文藝時代」の川端康成、横光利一、片岡鉄平、そして「文藝春秋」の菊池寛は、藤澤桓夫の才能を認めて世に出してくれた恩人である。プロレタリア文学に在らずば文学ではないという状況の中で、彼等は「新潮」から「新感覺派」を標榜して一線を画したため、小ブルジョワジーの芸術派と呼ばれることもあつた。

ようやく昭和三年（一九二八）、東大二年生の秋になって、湯ヶ島温泉から東京に戻つた藤澤桓夫は、今宮中学校（旧制）以来の親友である武田麟太郎が住む、本郷の下宿屋「長栄館」に入った。その年には「辻馬車」の編集長は武田に代つていたが、左傾が著しくなり、同人たちも離れていく中で、結局十月の三十二号で終刊してしまう。

そして、武田とともに東大新人会に入り、マルクス主義に浴することになる。社会の矛盾に対して行動しようとする発想は健康であるが、体調に不安を抱える藤澤は「活動」にのめり込むことができなかつた。一方、武田は柳島の東大新人会セツルメントの労働学校を拠点に活動^④を始めた。

藤澤桓夫は武田麟太郎や長沖一らとともに東大左派の文芸誌「大学左派」の創刊に加わり、長栄館の武田が出たあとの隣室が編集室になって、同年七月十日に創刊号が発行された。プロレタリア文学を書き始めたが、翌昭和四年（一九二九）一月に体調が悪化して、再び湯ヶ島温泉に転地療養に赴き三、四か月滞在した。東大での出席日数が足らず、英文科の口頭試問は英語で行われて厳しいため、結局国文科に転科した。要するに、東京帝国大学に入学したが、授業出席は思ひのほか少なかつた。同四年二月十日には日本プロレタリア作家同盟（ナル

プ)が結成されて加入した。「文藝春秋」に『生活の旗』、「文學」に『ローザになれなかった女』を発表した。のちに、マルクス主義のおかげで一人前になれた気がしたと書いている。

プロレタリア文学の学生作家としての実活動は四年に満たない。しかも、その間は湯ヶ島温泉への転地療養を繰り返していた。のちの数ある回想録類を参照しても正確な期日がいまいいため、湯本館に取材したが、ここでも藤澤桓夫に関する記録は見当たらなかった。いずれにせよ、この間のプロレタリア小説は湯本館で執筆することが多かったと推測できる。しかも、横光利一、川端康成、片岡鉄平、菊地寛との接触が続き、文学の方向が定まったように見える。

昭和五年(一九三〇)三月、東大を卒業する月に、文藝春秋社の「オール読物」初代編集長の馬海松が、信州富士見高原サナトリウムで完全回復したことを聞いて、自分も入院する決心をした。そこで、菊地寛が所長の正木不如丘博士宛に「入院料を安くしてやってくれ」との紹介状を書いてくれた。⁵⁾

二 富士見高原サナトリウムでの創作活動

藤澤桓夫の文献調査をしても、富士見高原サナトリウムに入院していた正確な時期が不明なため、現在「旧富士見高原診療所資料館」が所蔵している正木不如丘博士の入所台帳を調査した。氏名のイロハ順に記載され、藤澤桓夫の項では「ㄨ22/3ㄨㄨ26/12全快」と記されていて、共に昭和八年を同じくとしているが、退所日に記入したらしく、他の展示資料と合わせて解明して昭和五年(一九三〇)三月二十二日入所、昭和八年(一九三三)十二月二十六日全快退所であることが判明した。【図1】

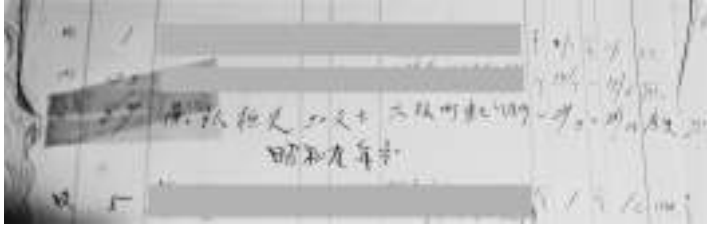


図1 旧富士見高原診療所資料館所蔵「入所台帳」の部分・藤澤桓夫の項



図2 富士見高原サナトリウムの別棟でのスナップ写真

この入所中に執筆、または出版された著作を列挙すると、昭和五年五月『生活の旗』、七月『傷だらけの歌』、十一月『辻馬車時代』、十二月『航海一週間』（翻訳）、昭和六年一月『作家の感想』改造十三卷一号、二月『現代日本文学全集六十二・プロレタリア文学集』、六月『ナップ傑作集』、『日本小説集』、十二月『村の床屋』朝日新聞、昭和七年五月『晴れ——或る生活風景——』新潮二十九卷五号、八月『こぞどろ顛末』文藝春秋十卷八号、昭和八年一月『漁夫』、『林檎の身代わりをした子供』新潮三十卷一号、『新しい夜』中央公論四十八卷一号、五月『新大阪風俗』文藝春秋十一卷五号、六月『鼠』新潮三十卷六号、七月『新作三十三人集』、十二月『街の灯』春秋社単行本。

他に昭和十六年十月十八日秩父書房刊の初の随筆集『大阪手帖』に富士見高原で書いた『高原新緑』や『雪と太陽との風景』など五編の随筆を所収している。富士

見高原の風景が藤澤桓夫の心を癒し始めた。【図2】

プロレタリア文学から徐々に中間小説風に変化しているのが見て取れる。しかし、新感覚派に戻ったのではない。昭和五年十一月十日改造社刊の新鋭文学叢書『辻馬車時代』の序にこう記している。(傍線は筆者)

ここに収めた十七篇の小説を、僕は、一九二四年と二六年との間で、書きました。ここには、二十五歳以前の僕が——數へ年で二十一歳から二十三歳までの僕が、寄せ集められてゐます。

或る人たちは、僕にかう言ふ美しさのなかにゐた時代のあることを知つて、恐らく吃驚するでせう。が、さう言ふ人たちこそ、微笑のうなづきをもつて、僕の「辻馬車時代」を振り返つてみてくれるに相違ないと僕は思ひます。何故ならさう言ふ人たちこそ、現在の僕を一番よく理解してくれる人たち、「辻馬車時代」から「傷だらけの歌」につづいて来た道——光彩の抒情詩から激情の抒情詩への道を一番正しく跡づけてくれる人たちであり、そして、これが最も重要なことなのですが、これからさき僕がさらにどのやうに變化して行くかを一番嚴格に監視してくれる人たちでせうから。

ここに収めた十七篇の小説を書いた頃、僕は十人ばかりの仲間と「辻馬車」と言ふ同人誌に拠つてゐました。僕は、この本に「辻馬車時代」と言ふ題名を選び、この本を、「辻馬車時代」からの僕のよき友人たちに、そして、その頃から僕を書くものを愛し僕とともに變化して今もなほ僕を書くものを愛してくれてゐる人たちに、おくります。

ともあれ、「辻馬車時代」を版にするに當つての僕の感想は、二十五歳以前の自分——今の自分から見ればまさに顛倒した世界で歌つてゐた自分への強い決別です。高まる豹變を輝かしい美德だと信じてゐる僕に取つて、強い決別は限りなく快い感想だ。人たちはここに「藤澤桓夫前派」の標石を見るでせう。

そして、恐らくは藤澤桓夫にとって本格的なプロレタリア小説の最終作とも言える『漁夫』を昭和七年一月から三月にかけて「中央公論」に発表した。これは全日本無産者芸術連盟（ナツプ）の「芸術大衆化に関する決議」（戦旗）昭和五年七月）の「3. 何を題材にするか？」「7. 農民、漁民等の大衆闘争の意義を明らかにするやうな作品。」に合致する小説である。⁶⁾

岩手県旧山田合同労働組合に取材した小説で、藤澤のそれまでの情緒的なプロレタリア小説から一歩踏み出した感がある。逆に、プロレタリア文学への決別記念に書いたとも受け取れる。

岩手県川畑漁港の漁夫たちはイカ釣り漁船で生計を立てているが、漁業組合の旦那衆はトロール船を仕立ててイカをこっそり獲るようになる。トロール船の過酷な労働につかざるを得ない者も多くなり、そうでなくとも漁業組合に搾取され、ますます生活が苦しくなる中で、合同労働組合が組織される。朝鮮人の漁夫も入ってきて軋も生じてくる。主人公は言う。「な、みんな同じ人間だど。どこの人間だつて人間の値打ちに変りはねえんだ。世界中の貧乏人はみな同じ仲間で、一つになって手を繋いでやって行（え）がなけアいけねえんだど」。

『漁夫』は翌昭和八年一月十五日に春陽堂日本小説文庫で単行本化された。二月二〇日には、小林多喜二が築地警察署で虐殺されている。

三 夕刊大阪新聞編集長・佐藤卯兵衛宛の書簡

富士見高原サトリウムでの療養中の昭和八年、二十九歳にしてプロレタリア文学から転換して、その後の中間小説へと移行していく様子には、もうひとつ解せない感じを持たざるを得なかった。単に菊池寛に勧められ、療養費を得るために新聞小説の分野に踏み込み、職業作家として筆一本で生活していくために通俗小説に転換したとすれば、その後の藤澤桓夫独自の都会的な流行小説を生み出すには動機が希薄に過ぎる。昭和三十六年（一九六一）十一月十七日の朝日新聞大阪版に『わが小説』と題して寄稿し、「純文学のトリデの狭さに強い抵抗を感じ、あらゆる階層の人たちが読んでくれ。しかも芸術の高い香りのものを書いて来た」と書いてはいるが、なぜ青年男女ばかりを描くのか、藤澤桓夫自身の言葉で知りたいと思っていた時、一通の封書を古書オークションで発見した。それは藤澤桓夫が夕刊大阪新聞の編集者佐藤卯兵衛に宛てた昭和八年三月三十一日付の書簡である。

【図3-6】（傍線は筆者）

宛先…大阪市北区堂島浜通四丁目三

夕刊大阪新聞社 佐藤卯兵衛様

差出人…長野県富士見高原療養所

藤澤桓夫

三月三十一日、富士見。

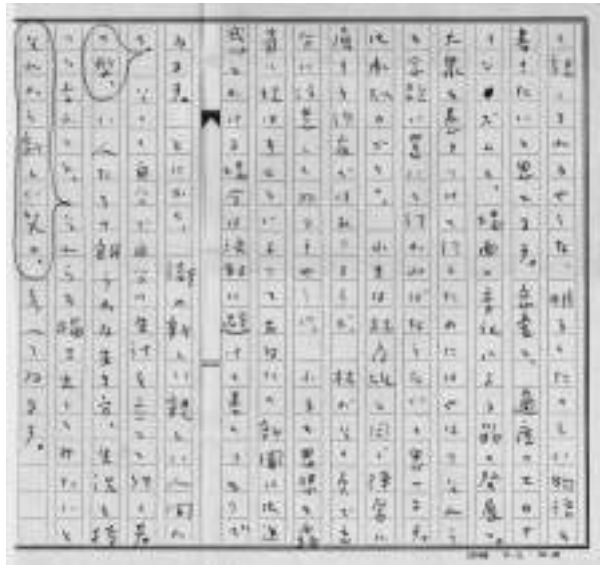
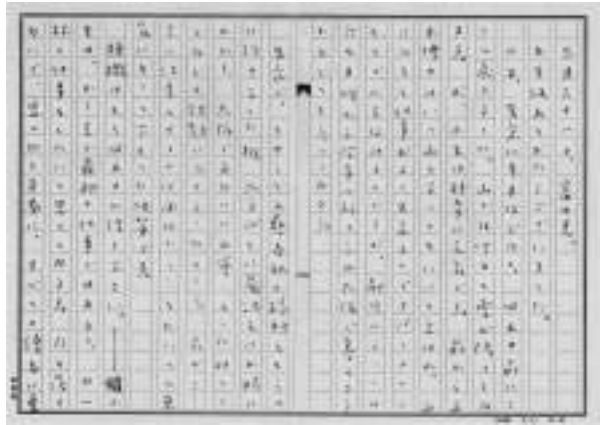


図3～6 夕刊大阪新聞社佐藤卯兵衛宛藤澤桓夫差出書簡写真

お手紙ありがとうございました。

小生、東京に半月ほどゐて、四五日前にここへ戻りました。山では今日も雪が降つてゐます。が、小生は非常に元気です。前から正木博士はいつ山を下つてもいいと言はれ、山にゐると仕事がよく出来るのでアパートのつもりで小生はゐるのですが、都合によっては六七月頃から今年一杯くらゐ大阪で暮らさうかなども考へてゐます。

東京で、ちやうど文藝春秋の稿料をもらひに行きました折、久方ぶりに菊池氏にお眼にかかり、大阪であなたにお會しました時のことなども話題に上りましたところ、君がさう言ふ仕事をやるのは面白からうといへん乗氣になつて下さつた次第です。

梗概はもう四五日お待ち下さい。——小生は、かう言う最初の仕事ではあるし、力一杯の仕事をしたいと思つてゐます。力を落さないで、思ひ切り平易に、すべての讀者に愛し親しまれるやうな、明るくたのしい物語を書きたいと思ひます。恋愛と、適度のエロテイシズムと、場面の變化による筋の發展と。大衆を惹きつけて行くためにはやはりそれらを念頭に置いて行かねばならないと思ひます。

御承知のごとく、小生は林房雄と同じ陣営に属する作家ではありますが、林がその点で充分に注意してゐますやうに、小生も思想を露骨に現はすことによつてあなたの新聞にご迷惑をかける場合は絶対に避けて書くつもりでゐます。

とにかく、街の新しい親しい人間たちの型、そして自分で自分の生計を立てて行く若い人たちの朗らかな生き方、生活を持つと言ふこと、それから新しい笑ひ、それらを描き出してみたいと考へてゐます。

『街の灯』を皮切りに、新聞小説家として名を成していく若き藤澤の決意が手に取るように分かる。単にこの

仕事を貰わんがばかりの意気込みではない。「街の新しい親しい人間たちの型、そして自分で自分の生計を立てて行く若い人たちの朗らかな生き方、生活を持つと言ふこと、それから新しい笑ひ、それらを描き出してみたい」という言葉は、以後三四年間にわたって藤澤桓夫の小説に一貫する信条になった。以降に書かれた新聞小説では、『街の灯』が昭和八年までの作品とそれ以後の作品を分け、かつ橋渡しをしたのである。

この書簡でもうひとつのポイントは「小生は林房雄と同じ陣営に属する作家ではありませんが」の部分である。林房雄は藤澤桓夫と同年生れだが、大正十二年（一九二三）に東大法学部に入学した。藤澤桓夫が東大文学部に入学した時点では、文学部の学生を新人会に勧誘する目的で林は社会文芸研究会を作っていた。プロレタリア文学では藤澤桓夫の直近の先輩に当たる。林は大正十四年十一月十五日の京都学連事件で治安維持法の初の適用で検挙され、ほどなく釈放されたがこの一件で有名になっていた。昭和三年（一九二八）十月の「戦旗」に『プロレタリア大衆文学の問題』を発表し、「プロレタリア作家の作品は労農大衆の読者を持っていない。大衆に愛読されなければならぬ」と宣言していた⁷¹。

また、昭和四年（一九二九）十月から東京朝日新聞に連載した『都会双曲線』は通俗性を持つ小説として、片岡鉄平に近いものだった。ここで「林房雄と同じ陣営」と書いたのは、単に「ナップ」の作家であるという意味以上のニュアンスを伝えようとしたのだろう。藤澤桓夫の蔵書を取めた大阪府立中之島図書館の「藤沢文庫」には、林房雄の献呈署名付きの『文学のために』（昭和九年ナウカ社刊）が遺されている。林房雄は昭和八年十月には川端康成、小林秀雄、武田麟太郎らと「文藝界」を創刊することになる。「大衆のための文学」については林房雄に同調するところが大きかったことを示しているとも考えられる。

さらに、この連載が「夕刊大阪新聞」であることが、『街の灯』の舞台を大阪にする要因と考えられるが、これに先立つ同年八月に書かれた『新大阪風俗』は、大阪歌舞伎座の六階にあるアイススケートリンクで滑る和服

姿の娘と大阪商科大学の学生の恋愛模様を描き、大軌（大阪電気軌道）の沿線や心齋橋を舞台にしている。既に大阪への帰還を決めていただけでなく、テーマそのものにも「大阪」が大きな要素として入ってきている。つまり、藤澤桓夫文学の「大阪回帰」である。

四 『街の灯』のストーリー

『街の灯』は夕刊大阪に昭和八年（一九三三）五月から連載された。単行本で確認すると、三〇章一七七回分となる。夕刊大阪新聞は大正十二年（一九二三）六月一日に、天下茶屋で新聞販売店を経営していた前田久吉によって日刊の「夕刊大阪」が創刊され、昭和八年には僚紙として「日本工業新聞」も創刊された。これらがのちの「産業経済新聞社」である⁽⁸⁾。

連載のあと同年十二月に春秋社から単行本化され、昭和三十四年（一九五九）三月に東方社から再刊された。その著者あとがきに次のように記している。

あとがき

「街の灯」は私の最初の新聞小説です。大学を出てまだ間のない頃でした。今は亡き菊池寛先生の推薦で、「大阪新聞」（今日の「産経新聞」）に半年余にわたって連載されました。当時の新聞小説は大体百二十回で終るのがしきたりで、「街の灯」もその約束で書き始めましたが、幸いに意外に反響を得て、編集者の要請で、二百回まで延ばしたのを記憶します。完結とともに映画にもなりました。

その後、この小説は永い間絶版になっていました。私の作品を支持して下さる人々のなかにも、私に「街の灯」という長篇のあることを御承知の方は少いのではないかと考えます。このたび、「街の灯」は東方社の好意で再刊されることになりましたが、作者としましては、読者諸賢が私の最初の新聞小説をどのような興味で改めて吟味して下さるか、その点に大きな愉しさを覚えます。

また、この作品の登場人物たちの生活への情熱や設計、青春の在り方の評価が、作者自身には今日の若い世代の人々のそれと、案外相通じるものが多分にあるのではないかと言う気がしてならないのです。その意味でも、「街の灯」の再刊に作者は少なからぬ期待を抱く次第であります。

昭和三十四年二月

大阪住吉にて 藤澤桓夫

初版本発刊から二十六年を経ての著者自らの感想である。それは現代に読み返している私自身の感想とも重なる。藤澤文学は古びることがない。では、『街の灯』の内容を見てみたい。⁹⁾

① 主な登場人物

松井荘吉 天下茶屋生れ。東京帝国大学医科を卒業し、助手を務めたあと、東京深川の貧民街に無産者診療所を開所する。

松井信子 荘吉の妹。女学校を卒業し、荘吉の診療所を手伝う。

貴志雪絵 三年前まで荘吉の婚約者。春潮会系の女流画家。奔放で男性関係が複雑。目白文化村の近代アパートに住んでいる。

貴志滋夫 雪絵の弟。旧制高校三年生。東京帝国大学の独文科を目指す。南海諏訪ノ森駅近くの洋館に住んで

いる。

横田朱美子 女学校を卒業し、細工谷の石原にフランス語を習っていて、そこで貴志滋夫と知り合い恋仲になる。

天王寺権寺町の退役軍人の娘。

伊藤冬野 東京に家出した朱美子は品川の下宿に住むが、伊藤冬野の偽名を使う。

名取秀三 深川の貧民街の長屋に住み、郵便局に勤めている。バイオリンに才能がある。

小松ハル代 深川の貧民街の長屋に住んでいる銀座のデパートガール。秀三と幼馴染。山崎襄に言い寄られる。

清水三郎 私立大学文科の学生で詩人。山形県の議員の三男。雪絵に恋慕しているが、適当にあしらわれている。

山崎 襄 新興劇団の二枚目俳優。女性に気が多い。雪絵と付き合っているが、小松春代に言い寄り、伊藤冬

野（朱美子）にも手を出そうとする。鶯谷のアパートに住んでいる。

② 主な舞台とあらすじ

ある年の五月から翌年六月までの十四ヶ月間の出来事である。

〔大阪駅 荘吉・信子・滋夫・雪絵〕

五月、大阪駅にて兄松井荘吉と妹信子が東京への列車を待つ。荘吉は二人の唯一の財産だった天下茶屋の家を売って、東京の場末の貧民窟で貧乏人相手の医者を開業する予定だった。彼は東京の大学で助手を勤めていた時に、本所の帝大セツルメント実費診療所の仕事を手伝い、貧しい労働者たちが病院にもかかれぬ実情を見て、貧民街の医者になることを決意したのだった。先に荘吉が東京に行き、落ち着いたら信子を呼び寄せる予定。そこで肥料会社社長の子息、貴志滋夫を見かける。

滋夫も姉の雪絵を見送りに来たのだった。雪絵は奔放な美貌の女流洋画家として世間に知られていた。そして三年前までは莊吉の婚約者だったが、彼女の派手で消費的な性格が莊吉と合わず、結局婚約破棄していた。莊吉と雪絵は強引な彼女の希望により、同じ三等車で東京に向かうはめになった。

【大阪・細工谷 心齋橋 滋夫・朱美子】

二人を見送った後、滋夫は心齋橋にタクシーを飛ばした。滋夫は一年半前から週に三度、天王寺の細工谷に住む石原という篤学者にフランス語を習いに行っていた。

滋夫はそこで横田朱美子という、恩給生活の退役軍人の娘でつましい家の娘である女学生と知り合った。南海沿線の諏訪ノ森に帰る滋夫と、天王寺の権寺町へ帰る朱美子は時折上本町七丁目の停留場まで二人きりで一緒に帰ることがあった。昨日朱美子と、八幡筋近くの喫茶店カスターニヤで待ち合わせる約束をしていたのだ。想い合っていた二人は、滋夫の告白をきっかけに付き合い始める。

【東京・目白文化村 雪絵・清水三郎】

東京に来てから二十日後の六月中旬、雪絵は東京・目白の文化村の青葉にある近代アパートで、山形県の高額納税議員の三男の清水三郎と逢瀬を重ねていた。私立大学の文科の学生で詩人の彼は、彼女に夢中だったが、彼女はすでに飽いていた。彼女は退屈な毎日から逃れるためにひたすら官能の刺激を求め、それが醒めたあとの退屈と空虚に悩まされ、莊吉がどこで開業したのか気にしていた。

【東京・銀座 深川大工町 山崎襄・小松ハル代】

雪絵には、この一、二年彼女の遊び相手となっていた男がいた。新興劇団の二枚目俳優山崎襄だが、彼は銀座の某百貨店のネクタイ売り場の売り子小松ハル代に執心し、通いつめていた。ハル代は深川の大工町近くで、鉄工所に勤めていたが今は寝たきりの父親と小学校六年生の妹を養っていた。同じ長屋に住む郵便局員の名取秀三

はハル代の幼馴染だった。

【東京・深川大工町 莊吉・名取秀三】

この長屋近くに、松井莊吉が無産者診療所を開業していた。診療だけでなく、貧しい一家の高利貸しの借金を肩代わりすることもあった。

初夏の夜、無産者診療所の二階では、莊吉と妹の信子、小松ハル代、看護婦の羽田が、名取秀三のバイオリンに聴き入っていた。秀三には音楽家としての才能があったが、経済的に困窮しているため、それを伸ばすことは出来なかった。秀三はプロレタリアバイオリニストとして大衆を楽しませるつもりだった。

【大阪・甲子園ホテル 朱美子・滋夫】

八月中旬過ぎのある日、朱美子は暑中見舞いがてら石原氏を訪ね、そこで滋夫と合流した。帰りに二人はタクシーで阪神国道から甲子園ホテルに行き、ロビーでクリームソーダを飲みながら二人の将来のことを話した。滋夫にどこまでもついて行く決意をしている朱美子だが、滋夫は、果たして朱美子を養って生きていくだけの能力が自分にあるのかと、激しい悲哀と社会的生活への不安にさいなまれていた。その日朱美子と滋夫は、甲子園ホテルで結ばれた。

【東京・銀座 深川大工町 山崎襄・ハル代・秀三】

ある日、地方公演を控えた山崎襄が百貨店にハル代を訪ねて来た。仕事帰りのハル代を誘い、銀座の喫茶店ラインでお茶をして、渡したいものがあるからと次の日に山崎のアパートに来る約束をさせた。遅くに帰ったハル代を秀三がからかうが、ハル代の目には山崎と比較して野暮で無骨な秀三が貧弱に映った。

【東京・鶯谷 山崎襄・ハル代・雪絵】

次の日、鶯谷の山崎のアパートに来たハル代に、彼は紅玉の指輪を渡そうとする。そしてハル代が彼に抱きす

くめられた瞬間、貴志雪絵が訪ねてきた。

【大阪・諏訪ノ森 朱美子・滋夫・母道子】

朱美子はたった一度甲子園ホテルで結ばれた滋夫の子供を身ごもってしまふ。

八月末に、九月から広島専門学校で教鞭を取ることになった石原氏の送別会が、朝日ビル屋上のアラスカで行われた。その後石原氏の家に行くという口実を失った朱美子は、父の監視が厳しくなかなか外出出来なかった。やっと外出した朱美子は、喫茶店カスターニヤで滋夫と合流し、南海駅で電車に乗って大和川に向かった。そこで彼は母に彼女のことを打ち明ける決意を宣言したが、彼女は妊娠を告げられないまま、次の日に遭う約束をした。その夜、滋夫は母道子に朱美子のことを打ち明けるが、激しく反対される。道子は娘雪絵の恋愛事件以降、滋夫だけは自分の思うとおりに育てて自分の眼鏡に適った娘と添わせようとしていた。道子と争っている時に、滋夫は咯血してしまう。

次の日、医者に絶対安静を命じられた滋夫は、朱美子と会う約束を反故にしまった。その後も十日ほど連絡もないままに過ぎ、十月となった。滋夫の家に電話しても、外部からの連絡を取り次がないように道子に言い含められた女中に阻まれる。朱美子は思い切って諏訪ノ森の貴志家に行ってみるも呼び鈴を押すこともできずひとり高師の浜に行き、思い切り泣く。一瞬死の誘惑を感じるも、体内の生命の塊が動いたのを感じ、生きる意欲が湧き、家族の反対を思つて家出することを決意する。

【東京・目白 清水三郎・雪絵】

一方、目白の文化村では、毎朝渋谷の高等下宿を出て雪絵のもとに通う清水三郎の姿があった。彼女の部屋で二人で過ごし、夜が来るとダンスホールや酒場に繰り出す毎日だった。

弟滋夫の咯血を知った雪絵は、帝大病院で荘吉の診療所の場合を聞いて彼を訪ねる。彼女の話聞いて、荘吉

は滋夫に手紙を書くことにする。

【東京・品川 朱美子・山崎襄・その姉高子】

十月二十七日に家出を決行した朱美子は、東京へ行き、品川の古下宿屋「高砂屋」にいた。伊藤冬野と名乗り、職を探すも、一向に見つからず、一月下旬になった。ひよんなことから近所の少女茂代と知り合い、その母親高子に招かれて家に行く。

高子は山崎襄の姉で、冬野（朱美子）は彼女にその美貌を見込まれ、女優になるよう勧められる。その頃山崎襄は、小松ハル代をなかなかものにできずイラついていた。久しぶりに姉高子の家に小遣いをせびりに行き、そこで冬野（朱美子）を紹介される。襄はひと目で彼女の美しさに魅了され、彼女は明後日に襄のアパートに行く約束をする。

【東京・目白 ハル代・荘吉】

ハル代は荘吉の診療所に行き、山崎襄の件を荘吉に相談する。彼を愛しているがその言うことを信用できないので、人物を見て欲しいと荘吉に頼む。

【東京・鶯谷 山崎襄・朱美子・荘吉・秀三・ハル代】

舞台的素質のテストのため鶯谷の山崎襄のアパートを訪れた冬野（朱美子）が、俳優の素質を備えていることを襄は見抜く。しかし彼の目的は冬野（朱美子）をものにする事だった。演技テストにかこつけて襄は彼女に迫ったが、その刹那、ハル代が荘吉と秀三を伴ってアパートを訪れた。ノックしようとしたその瞬間、襄に襲われた冬野（朱美子）の悲鳴を聞く。ドアに鍵がかかっているため窓伝いに部屋に侵入した秀三が襄を殴りつける。その隙に冬野（朱美子）は部屋を飛び出した。襄の正体を知ったハル代はすすり泣く。

【大阪・諏訪ノ森 滋夫】

一月の終わりに近づき、滋夫はやつと普通の身体に戻った。朱美子から連絡がないことに焦れた滋夫は隙をみて家を抜け出して横田家に朱美子を訪ね、彼女が家出したことを知る。

【東京・品川 朱美子・高砂屋の夫婦】

三月になり、あと二ヶ月ほどで臨月を迎える冬野（朱美子）を、高砂屋のお内儀がやさしく、ここで産むように言ってくれる。その夜、高砂屋の亭主に襲われた冬野（朱美子）は力任せに彼を突き飛ばしてしまう。彼が呼吸をしていない様子に、冬野（朱美子）は絶望し、死を決意して下宿屋を出た。

【東京 雪絵・清水三郎・大野九一】

雪絵は清水三郎を捨てて、新しい愛人で大野信託会社の社長大野九一と遊び歩いていた。

【東京・目白 荘吉・朱美子・秀三・ハル代】

荘吉はある日の夜遅く、大森の望海楼で同窓会があった帰りに、省線の線路に飛び込み自殺しようとした冬野（朱美子）を助けて診療所に連れ帰っていた。そして本所の産婦人科横川医院に入院させることにした。

冬野（朱美子）から、品川の下宿屋の亭主を殺したと打ち明けられた荘吉は、秀三に頼んで様子を見てもらうことにした。秀三はハル代を伴って品川に行き、亭主が生きていることを確認する。

【東京・目白 荘吉・朱美子・雪絵・大野九一】

冬野（朱美子）は不幸の打撃と肺炎の高熱のため、横川医院に来て五日目に流産してしまう。しかし荘吉に励まされ、ふたたび生きる意欲を取り戻す。冬野（朱美子）に惹かれはじめていた荘吉は、彼女の入院費を借りに雪絵のアパートに行く。たまたま大野九一と過ごしていた雪絵は、彼を洋服ダンスに隠して荘吉を招き入れ、彼の要望を聞くことにした。

冬野（朱美子）は退院して診療所に寄宿していた。彼女は次第に荘吉に惹かれていった。ちょうど一ヶ月後の

五月、彼女は置き手紙をして診療所を出た。その夜、莊吉は彼女の失踪に耐えられず、街を歩き、浅草のM百貨店の屋上に行く。そこからの大東京の夜の夜景（街の灯）に、近代資本主義社会の魔法の花園を見る。

【東京・深川大工町 莊吉・滋夫】

莊吉が九時半に家に帰ると、滋夫が訪ねてきていた。上京して本郷に下宿を決めたという。滋夫は莊吉に勧められるまま、自分の恋愛事件を話す。思わぬ符合に莊吉はよもやと思うが、名前が違うのでやっぱり人違いなのだと自分に言い聞かせる。滋夫は彼に、自分のブルジョア家庭に愛想を尽かしたと吐露する。

【東京・目白 雪絵・清水三郎】

同じ夜、雪絵に捨てられ、憔悴しきった清水三郎が雪絵のアパートに向かった。彼女は大野九一が誘う伊豆への温泉旅行の支度をしていた。三郎をすげなく追い返そうとする雪絵に、彼はピストルの銃口を向けるが、結局雪絵の前で自殺してしまう。彼を置いて雪絵は大阪に帰ろうと飛行場に向かった。飛行機に乗り込んだ雪絵は、浅草のM百貨店あたりを見下ろして、ついに書置きを残して飛行機から身を投げる。

【東京・深川大工町 莊吉・滋夫・秀三・ハル代・朱美子】

それから半月後の六月、莊吉の家に滋夫、秀三、ハル代、莊吉と信子の五人が雑談し、雪絵を思っていた。秀三がバイオリンで「ソルベージュの歌」を弾くと、滋夫は朱美子が思い出された。その窓の外には、やっと職を得た冬野（朱美子）が佇んでいた。窓から彼女を見つけた滋夫が飛び出して行く。

五. 『街の灯』のコンセプト

① 無産者診療所の場所

藤澤桓夫は大正十五年（一九二六）四月、二十一歳で東京帝国大学英文科に入学した。同期は武田麟太郎、堀辰雄、船橋聖一、深田久弥、今日出海ら。同人誌「辻馬車」は継続しており、この年から武田麟太郎が加わった。ほどなく東大新人会に参加し、同じく同期の亀井勝一郎をチューターにマルクス主義哲学を学び始める。⁽¹⁰⁾

東大新人会は学生セツルメント活動の草分けでもあり、藤澤らの入学前の大正十三年（一九二四）六月に柳島元町四十四（現墨田区横川）に建設された。武田麟太郎はここに寝泊まりして労働者教育部の仕事に携わった。藤澤がセツルメントに関わったかどうかは不明だが、武田麟太郎を通じて、状況を把握していたと考えるに不自然さはない。この東大新人会セツルメントは当初深川猿江裏町（現江東区猿江）に建設予定だったが、あまりにも貧困すぎて学生のセツルメント活動には適さないと意見があつて、柳橋元町に決定されたという経過がある。⁽¹¹⁾

『街の灯』の無産者診療所は深川大工町に設定されているが、ここは深川猿江裏町の隣町で、同じく貧民街だった。藤澤がこの場所を選んだのは、より貧民窟だという理由で外された街にこそ、松井莊吉の無産者診療所を置きたいとの願いが現れているのではないだろうか。観念的にこのようなプロットにしたのではなく、東大新人会でのセツルメント実践の中から出たリアリズムである。それは、プロレタリア文学の徒として藤澤が描いて来たテーマでもある。

② 目白文化村

貴志雪絵が住んでいるのは、目白文化村の近代アパートという設定になっている。

目白文化村は大正十一年（一九二二）から、堤康次郎の箱根土地株式会社が売り出した分譲地が最初である。官吏やサラリーマン、学者、作家、画家たちが外観は西洋風で、中身は和洋折衷の住宅を続々と建てたところから、目白文化村と呼ばれるようになった。現在の新宿区下落合、西落合、下落合の郊外住宅地に当たるが、吉屋信子や林芙美子の邸宅や佐伯祐三のアトリエもこの中に含まれる。

中でも「目白会館・文化アパート」は大正十三年（一九二四）頃に建てられ、小説家の矢田津世子や芸術家達に住み着いていた。つまり、昭和モダンを象徴するようなアパートだった。これが、貴志雪絵の「近代アパート」になった。¹²

実は、藤澤桓夫が東京に出てきて最初に寄宿したのは、叔父の石濱純太郎が旧制市岡中学で同期だった実業家中谷義一郎の下落合の邸宅だった。今も残る中谷邸はモダンな洋風住宅である。ここから本郷の東京帝大に通っていた藤澤にとって、目白文化村はモダン文化の象徴でもあったのだろう。¹³

加えて言及すれば、『街の灯』には昭和モダンを代表するような品々が登場する。莊吉の吸う煙草は「バット」だが、雪絵は「ミス・ブランシユ」を吸い、香水は「リュシアン・ローレン・A」である。また、朱美子は黒いセルロンの帽子に薄茶鼠のファンシイ・ラテン・クロースの洋服を着ている。喫茶店は心齋橋の「カスターニヤ」や銀座の「ライン」、音楽はイタリアの歌姫ガリクルチが歌う「ソルヴェージュの歌」など、新聞小説だからと言つて手を抜かないハイカラぶりである。都会派の萌芽がすでに表れている。

③ 大阪の地

藤澤桓夫は船場の備後町に生まれ、五歳から二年間を岸和田で暮らした。島之内の竹屋町に帰って育ち、旧制今宮中学から播磨町の旧制大阪高校に進学した。住吉区千躰町（現墨江）の叔父石濱純太郎の邸にも出入りして

いた。南海電車を使ってきた土地勘が舞台設定に出ている。

松井莊吉と信子が生れ育った天下茶屋は、父親が医者を開業していた家があった場所で、南海線が最寄駅である。貴志姉弟の父親である肥料会社社長と松井兄妹の父親が親友だったため、莊吉と雪絵が婚約していた。貴志家は裕福で堺の南海線諏訪ノ森の洋館に設定にして、両者の結びつきを南海線でイメージさせたのだろう。

朱美子は退役軍人の娘であるところから、市内でも閑静な中流の家庭が多い夕陽丘の椎寺町に設定し、むしろ貴志家にはおいそれとは近づけない距離感を持たせたとも考えられる。滋夫と朱美子を結び付けた仏語教師石原は細工谷に住んでいるが、厳格な父親のもとで通える距離感としては同じ区内の設定で、しかも職を辞して住む学者であるから、上町でも下町風の細工谷としたように思える。

④ 浅草松屋百貨店 屋上からの「街の灯」

物語の後段の「都会は怪獣だ」の章がハイライトになっている。退院して診療所に寄宿していた冬野（朱美子）は次第に莊吉に惹かれていく。しかし、彼女は置き手紙を残して診療所を出てしまう。その夜、莊吉は彼女の失踪に耐えられず、街を歩き、浅草のM百貨店の屋上に行く。そこからの大東京の夜の夜景（街の灯）に、近代資本主義社会の魔法の花園を見る。

昇降機が、莊吉の身体を一直線に、M百貨店の屋上へ、運んでいった。（略）

と、忽ち、彼の眼下には、大東京の夜景が、美しい灯の海となって、現れて来た。

すぐ脚下の浅草から、上野、本郷、遠く新宿の灯、左手には丸の内から銀座方面へかけての灯、灯、灯、五彩に明滅する一帯の灯の海！

美しい蠱惑の街の灯——これこそ近代の資本主義社会が科学の呪文によって生み出した魔法の花園だ。人類の歴史に於て、われわれは、いつ、地球の表面に、これ以上に眼を奪う豪華な花園を持つたことがあるであろうか？

だが、こうしてじっと見下ろしていると、莊吉の眼には、次第に、この都会の美しい夜景が、眠れる一匹の巨大な怪物のように見えはじめて来た。

それは息ついている。

「ああ、街の灯よ！」莊吉は、思わず、呟いた。

M（松屋）百貨店の屋上にいる莊吉と同時刻に、雪絵は飛行機の窓から東京を見下ろし、身投げをする。このシーンから『街の灯』のタイトルが取られた。

六 『街の灯』の周辺

① 出版

夕刊大阪に連載された『街の灯』の新聞記事自体は現物確認ができていない。連載の同年十二月十三日に、東京日本橋の春秋社から単行本が刊行された。表紙画・装丁は宮田重雄である。宮田は慶応義塾大学医学部を卒業し、梅原龍三郎を師と仰ぐ画家だった。富士見サナトリウムの正木不如丘と宮田重雄とは、慶応での助教授と生徒の関係であり、正木不如丘が主宰していた同人誌「脈」に「大井九三」の筆名で宮田は執筆と装丁者として参



図7 藤澤桓夫著『街の灯』春秋社
昭和八年十二月十三日刊の初
版本表紙。装幀画は宮田重雄。

加していた。そうした経緯から、『街の灯』の装丁者として、正木不如丘が宮田重雄を推薦したと推定できる¹⁴⁾。この表紙画は、昭和モダン期の新感覚モダニズムの装丁画の中でも、出色のものだと評価できるだろう。【図7】

大阪府立中之島図書館の「藤沢文庫」に、「石濱叔父上様恵存 藤澤桓夫」の署名本が所蔵されている。この本の刊行の年に、藤澤は叔父の石濱純太郎邸の離れに住み始めたから、共有の書架の中に所蔵されていたと考えられる。

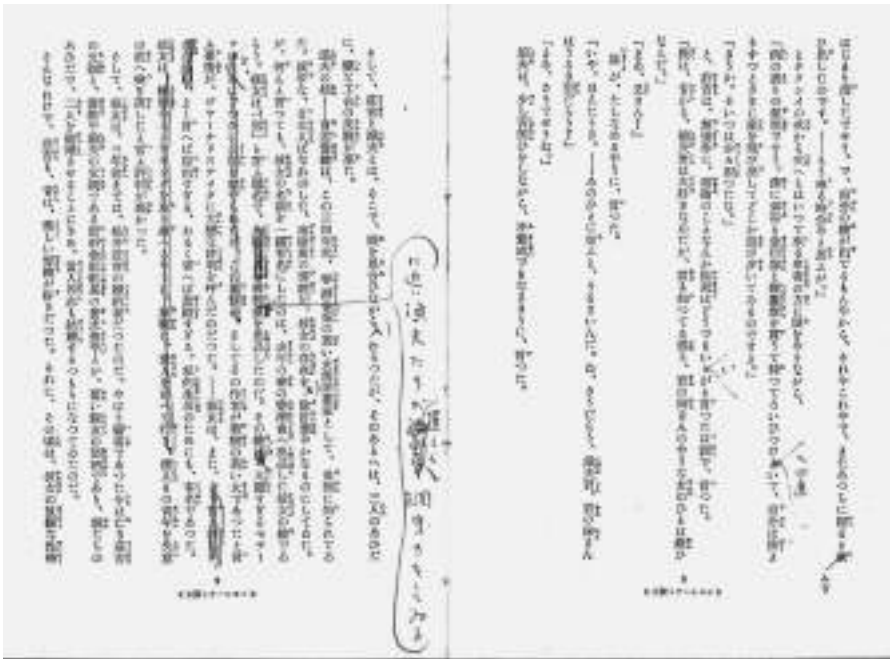


図8 大阪府立中之島図書館「藤沢文庫」所蔵春秋社版『街の灯』の書き込みのあるページの例。

内容は新聞記事をそのまま本にしたもよう、旧仮名使い、総ルビになっている。この本で貴重なのは、藤澤自身の青万年筆でほぼ全頁にわたって校正が書き込まれていることである。例えば第一章「大阪ステーション」では、雪絵の油絵について「彼女は『男』といふ題名で、大胆な男の裸体画」を出品したのだ」という部分では、「大胆な」を消して、「裸体」と「画」の間に「に近い漁夫たちが遅く網曳きをしてゐる」を挿入している。

これが再刊されたのは、昭和三十四年三月十日刊行の東京都文京区の東方社版であるので、これのための校正かと想定して、春秋社版と比較してみたが、新仮名使いに改められている外は、差異はなかった。何のための校正かは謎である。ただ、初めての新聞連載であったため、単行本化された後に、記述内容に不満が生じたものと推測できる。各ページに筆が入っているところから、詳細な研究が必要と考えている。

また、再刊本は新仮名使いであり、ルビがないため、春秋社版では「乗合自動車」に「バス」のルビがふつてあるなどを見ると、なおさらのモダン表現に気づかされる。【図8】

② 映画化

新聞連載、単行本刊行の翌年に東京の大都映画により映画化され、昭和九年（一九三四）三月一日に封切られた。監督は吉村操、出演者は松井莊吉に海江田譲二、妹信子に琴路美津子、貴志雪絵に佐久間妙子、弟滋夫に城英二、朱美子に琴糸路で、無声映画である。【図9】

この映画の宣伝のため道頓堀でパレードが行われ、原作者藤澤桓夫も引っぱり出された。宣伝終了後には、出演俳優達と朝日座の隣のキャバレーに駆け込んだという。¹⁵

巣鴨にあった大都映画の撮影所は、昭和二十年（一九四五）三月十日の東京大空襲によってフィルムもろとも大半が消失したため、『街の灯』についても今では観ることができない。大都映画自体も、昭和十七年（一九四二）



図9 大都会映画『街の灯』のチラシ

七 まとめ

藤澤桓夫の小説は、『街の灯』の前後で大きく変化した。それを「純文学から遠ざかった」と評価するのがこれまでの文壇における通説である。しかし、それを単純に「新聞小説の名手と見なされ、通俗小説を大量に生産するようになった」と一面的に評価してしまっていないものだろうか。問題はその「遠ざかり」方と、以降の作品の魅力である。その舞台を藤澤桓夫が生れ育った大阪に据えて、東大新人会からプロレタリア文学に飛び込んだ時に馴染んだ無産者階級の街で展開するストーリーにしたのは、プロレタリア文学への決別と大阪回帰の決心の表れに他ならない。つまり、藤澤桓夫が誰にも真似のできない自分の小説を書きたいと願い、実行するに至る橋渡しをしたのが『街の灯』なのである。

一月に軍事統制の一環として企業統合が発令され、日活、新興キネマ、大都会映画が合併されて大映が発足し、この三社のスタッフの多くが大映に赴いた。その中で作られ大ヒットしたのが昭和十七年十月一日封切の藤澤桓夫原作映画「新雪」である。¹⁶⁾

発端に佐藤卯兵衛への書簡に書いているように「街の新しい親しい人間たちの型、そして自分で自分の生計を立てて行く若い人たちの朗らかな生き方、生活を持つと言ふこと、それから新しい笑ひ、それらを描き出してみたい」との一念には、筆一本で生計を立てることを決心した二十九歳の藤澤桓夫自身の姿が投影されている。以降の小説家人生を貫き通した藤澤文学は、古典的な「純粹小説」論争や「中間小説」論争を超えて、現代的な文学の課題を提示したものだと思える。現在に『街の灯』を読める環境がなく、その内容を伝えるために詳細なストーリーの解説を試みたが、元来、小説は通して読まなければその魅力に接することはできない。その点、絶版になって久しいこのような小説の運命に、消えゆく文化遺産に対するのと同じ慨嘆を覚える。けだし、そのような文学の再興の任務を負っているのが文学学会であることを忘れてはならない。

注

- (1) 「昭和最後の文士 藤澤桓夫」(拙著「大阪春秋一五五号・回想の藤澤桓夫」平成二六年七月)一四〇―一七頁
- (2) 「藤澤桓夫著書目録」(谷澤永一・肥田皓三編「大阪春秋一五五号・回想の藤澤桓夫」平成二六年七月)五七―六三頁
- (3) 藤澤桓夫自筆年譜『現代日本文学全集六二プロレタリア文学集』(改造社 昭和六年二月一五日)二七八頁
藤澤桓夫著『人生座談三四二号』(読売新聞連載 昭和六二年一月一九日)
川端康成著『伊豆の踊子』の装幀その他』(「文藝時代」昭和二年五月)
- (4) 『評伝武田麟太郎』(大谷晃一著 河出書房新社 昭和五二年十月二〇日)一〇二―一二六頁
- (5) 『人生座談』(藤澤桓夫著 昭和五六年九月一九日 講談社)一五二―一五五頁「信濃の思い出」初出・読売新聞連載『人生座談 四九回』
- (6) 「芸術大衆化に関する決議」日本プロレタリア作家同盟中央委員会『近代文学評論体系六』(昭和四八年一月三一日)

角川書店刊) 三二二～三二二頁

(7) 『プロレタリア大衆文学の問題』(林房雄著『近代文学評論体系六』(昭和四八年一月三一日角川書店刊) 一三九～一四六頁)

(8) 『大阪春秋二二五号特集・大阪の新聞興亡史』(平成一九年一月刊) 五九頁

日本工業新聞社にはのちの昭和一四年(一九三九)に織田作之助が記者として入社して夕刊大阪の文芸欄を担当し、翌年には『合駒富士』を「野田丈六」名で連載している。

(9) 『街の灯』の春秋社初版本は旧仮名使い。東方社再刊本は新仮名使いに改められている。引用は東方社版による。

(10) 『大阪自叙伝』(藤澤桓夫著 昭和四九年九月二〇日朝日新聞社刊) 二一八頁「ビラを撒く大学生」、『人生座談』四〇二回(読売新聞夕刊月曜日連載 平成元年四月二五日)

(11) 『だれが風を見たでしょう——ポランティアの原点・東大セツルメント物語』(宮田親平著 平成七年六月文藝春秋刊) 三九～六三頁

(12) 『目白文化村』(野田正穂・中島明子著 平成三年五月日本経済評論社刊)

(13) 『人生座談 三四二回』「青年期の運」(昭和六二年一月一九日 読売新聞夕刊)

(14) 旧富士見高原療養所資料館館長荒川じんべい氏のレポート「藤澤桓夫の療養と『街の灯』について」を参考にした。

(15) 『人生座談 九五回』「佳人の思い出」(昭和五七年二月 読売新聞夕刊)

(16) 『大阪春秋特集・没後二五年回想の藤澤桓夫』(平成二六年夏号 通巻一五五号 平成二六年七月一日 新風書房発行) 田辺敏雄著「藤澤桓夫原作映画化作品を訪ねて」二二頁